2026_0625「国道１号線の自然観察」日々の理科 4337 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

横浜市内の国道一号線の中央分離帯に、大きな群落をつくって生育していたセイバンモロコシです。漢字では「西蕃蜀黍」と書き、「西方の異国から伝わったモロコシ（高きび）の仲間」という意味があります。原産地は地中海沿岸から西アジアとされ、日本へは牧草などとして導入されましたが、現在では各地で野生化し、道路沿いや鉄道敷、空き地などで普通に見られるようになりました。地下茎を四方へ伸ばして旺盛に繁殖するため、一度定着すると短期間で大群落を形成し、在来植物を圧迫することもある外来植物です。写真でも、幅の広い葉が一面を覆い、初夏らしい淡い緑色の花序をいくつも立ち上げている様子がよく分かります。

セイバンモロコシは一見するとススキやオギによく似ていますが、よく観察すると違いがあります。ススキは秋に銀白色の美しい穂を広げる日本の代表的な野草で、株立ちになって生育するのが特徴です。一方、オギは湿地や河川敷を好み、地下茎で広がって群落をつくりますが、花穂はより大きくふわりと開き、秋には白銀色に輝きます。これに対してセイバンモロコシは、初夏から円錐状の花序を伸ばし、穂は比較的細く垂れ下がります。また、太い地下茎による繁殖力が非常に強く、乾燥や暑さにもよく耐えるため、都市部の道路植栽でも勢力を広げやすい植物です。

道路脇で何気なく目にするイネ科植物も、その種類や生態を知ると、街の自然環境が少し違って見えてきます。国道の中央分離帯は過酷な環境ですが、セイバンモロコシはその条件にも適応し、毎年新しい茎を伸ばして群落を維持しています。一方で、その旺盛な繁殖力は在来植生への影響も指摘されており、場所によっては管理や除去の対象となることもあります。都市の緑の中にも、人の活動と植物のたくましい適応力が織りなす、生態系の一つの姿を見ることができる一枚です。　（2026 年６月下旬／横浜市戸塚区）